

# 皇太子ご婚約と流れる歲月

伊藤 千栄子

北海道立衛生学院助産婦科長

新年の華やいだ空気の中、突然とびこんできたニュースは、皇太子徳仁親王と小和田雅子さんのご婚約内定の報でした。秋篠宮家の朗報が先行したあと、期待していた国民のひとりとして、32歳になられる皇太子のすばらしい決断に拍手を送りたいと思います。

テレビのおふたりを拝見していると、もう34年も前になる、現天皇の皇太子時代のご婚約・ご成婚の際のモノクロのテレビ画面がオーバーラップして見えてきました。と同時に当時の自分の姿が鮮明に思い出されて、カレンダーを逆にめくるように、この長い歲月の中で自分がつくった失敗談を中心とするエピソードが、次から次へと走馬灯のように浮かんでまいりました。

## いたずら合戦の駆け出し時代

### 〔エピソード1〕食べ物で解決する単細胞

前述した34年前、私は助産婦学校を卒業して1年目、無我夢中の駆け出し助産婦でした。

その頃も、産科医と助産婦の連携はとても強いものがあつたと記憶しておりますが、新米助産婦の私などは、からかわれ、いたずらでだまされることが当然のような修行の日々でした。たとえばにせの夜間緊急入院の電話、あるいは帝切産婦の移送の知らせなど。

しかし、だました犯人の医師に怒りを爆発させる直前にお寿司の折り詰めを差し出され、怒りがたちどころにおさまってしまうという単細胞助産婦でありました。

### 〔エピソード2〕運搬車の不当使用

大変忙しい勤務のある日、「路上で経産婦が努責を始めている。即刻病院に向かわせた」と、その場

にいわせたという医師からの連絡が入り、私は分娩セット類をワゴンに載せて玄関めがけてひた走りました。すると玄関ロビーの奥まったところで運搬車に横たわっているその産婦は、全身毛布ですっぽり覆われ、さかんにいきんでいる様子です。そばにいる守衛さんが「いきまないように！」と声をかけています。運搬車を支障のないところに移し、うなり声をあげている産婦に声をかけながら、まず裾の方から毛布をはがしました。「アレ〜！」という気持ちの悪い声とともに目にとびこんできたのは、毛深い男性の脚でした。その産婦は産科医だったのです。

それを知ったとたん、私は運搬車を大きく傾けて粗大ゴミを捨てるがごとく床に医師を転がしました。当然その医師は落下時に打ちつけた痛みで大きな悲鳴をあげ、体をさすりながら逃げていきました。きっと体にはあざができたのではないのでしょうか。申し訳ないことをしたと反省しています。

しかし、このようないたずらの中に、医師は緊急対応の手段を自然に身につける機会をつくってくださったのだ、と思っております。

### 〔エピソード3〕学生全員から退学届を出された日

助産婦学校で教鞭をとるようになって、天性の粗<sup>そ</sup>忽<sup>こつ</sup>者は変わらず、枚挙にいとまのないほどエピソードをつくりました。教師として10年くらい経た頃でしょうか、ある日出張から帰ると2名の学生が、「先生！私たち臨床実習で取り返しのないことをしてしまいました」とあおざめた顔で言ってきたのです。何をしたのか詰問しても、学生全員で状況を報告してお詫びしたいとくり返すのみで、私は背中に冷や汗が走る思いでした。



覚悟を決めて教室のドアを開けると、全員がうなだれて声もなく着席していて、教卓には退学届と書いた22通の封書がぶ厚く重ねてありました。腹を決めて、「どのような事故を起こしたの？あなたたち！」とさげんでしまいました。すると暗幕のおりていた教室は突然明かりが消されて真っ暗。危ないぞ、と身の危険を感じた矢先、一筋の光を入れながらドアが開き、ぼうぼう煙をあげている品物を学生たちが運んできたのです。全員がハッピーバースデイを合唱するなかを。

また突然明かりがつき、私のためにあつらえたケーキには、(ひとつ気に入らないことに)ケーキの円周全体にびっしりと、なおかつジグザグにろうそくが立っています。ろうそくを一気に吹き消したあとは煙がたちこめ、一瞬学生の顔が見えないほどでした。学生の祝福の拍手の中、冷静にろうそくを数えてみると、几帳面にも私の年齢とぴたり一致しておりました。

縫いぐるみの猫「小鉄」に文献と称してその漫画も添えてのプレゼントもありました。ふだん教師として力不足を感じている私にとって、何ものにもかえがたいものでした。

### 機能性と無駄の必要性

助産婦になって35年を経て、もう「暗中模索」という言葉は使えないのかもしれませんが、私には仕事のひとつひとつが暗中模索といっても過言ではありません。スロースターターであり、みごとな手さばきで大向こうをうならすような仕事をしてきたわけでもない私が、長い教員生活でつかんだことのひとつは、「無駄を大切にしていきたい」ということです。

ものの本に、機能性を重視すると「機能的な幸福」しか得られない、と書いてありましたが、日常の教育の場で使っている用語でもある、理論、概念、機序、機能、効率などの他に、面白みがあって決して効率的でも教育的でもない「無駄」が、反面、学生にプラスアルファを生み出させる結果となっているように思えてならないのです。もしかするとこの無駄は、種々のものに挑戦して到達する戦略の中では、「遊び」として位置づけられるものかもしれません。

ユニークな性格の持ち主は、その性格を、ややもすると長所としての評価よりは欠点として捉えられがちですが、私のような失敗といたずら好きの教師は、「燃焼できるエネルギーがつねに内在していて、その消耗の手段をいまだに模索している教師」という立派な自己評価をしているのです。

モノクロ画面の美智子妃にどきどきしながら見入っていた20代の私。今、30数年を経てカラー画面にそのお子様がお妃になる方と映っている。心底嬉しく思います。

歳月人を待たず。光陰矢のごとし。この、経てきた道程と重ねた年齢を考えると、一抹の淋しさも感じます。しかし、無限の可能性を秘めている学生に関わらせて頂いているこの状態に感謝し、私独特の無駄(=いたずら)を学生に与えつつ、残り少なくなったこの仕事の任をまっとうしたい、と思っている今日この頃です。

\* \* \*

次号は、助産婦教育においては無限のエネルギーで着実に問題解決に向かう魅力的な女性、大阪府立助産婦学院の岡本喜代子先生にバトンタッチいたします。